

科目区分：教育の基礎的理解に関する科目等

授業科目名：生徒指導・進路指導論

タイトル：生徒指導・進路指導論

執筆者：梅田崇広（教育学部）

1. 授業の基本情報

本授業は、前期に教育学部の中等教育コースの学生、後期に理学部・工学部・農学部の学生に対して行われた。受講者数は前期は45名、後期は92名（理学部69名、工学部7名、農学部16名）であった。

本授業の目標は、次の3点とした。

- ①生徒指導の定義と役割、進め方について説明することができる。
- ②学校におけるいじめや不登校など問題行動への対応について説明することができる。
- ③自己実現につながる進路指導のあり方について、キャリア教育の観点から説明できる。

第1回～第10回まで主に生徒指導に関する基礎的知識・理論について学習し、知識を踏まえたうえで実践的検討を行い、第11回～第14回まで主に進路指導・キャリア教育に関する基礎的知識を学び、実際にキャリア教育に関する実践プログラムを作成する構成

となっている。第15回目は本授業のまとめとして、生徒指導・進路指導・キャリア教育の要点について解説をした。授業シラバスは、表1に示すとおりである。

表1：「生徒指導・進路指導論」シラバス

第1回	オリエンテーション：成長を促す指導に向けて
第2回	生徒指導の意義・方法原理・位置づけ
第3回	さまざまな教育活動ですすめる生徒指導
第4回	生徒理解の意義と方法
第5回	教育相談の意義と方法
第6回	生徒指導体制の構築と家庭・地域・専門機関等との連携
第7回	生徒指導に関する法制度
第8回	中学校・高等学校における暴力・

	非行をめぐる生徒指導
第 9 回	中学校・高等学校におけるいじめ・不登校をめぐる生徒指導
第 10 回	中学校・高等学校におけるインターネット利用をめぐる生徒指導
第 11 回	進路指導・キャリア教育の意義・方法原理・位置づけ
第 12 回	計画的・組織的にすすめる進路指導・キャリア教育
第 13 回	生徒一人一人の発達と課題によりそう進路指導・キャリア教育
第 14 回	学校段階間の接続をふまえた進路指導・キャリア教育の推進
第 15 回	まとめ：生徒指導と進路指導・キャリア教育の要点

授業の実施形態は、対面形式で行う予定であったが、新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、前期は授業全体を通して遠隔非同期（動画視聴）型での実施となった。後期は、第 1 回～第 9 回、第 12 回・第 15 回が遠隔非同期（動画視聴）型、第 10 回・第 11 回が対面型、第 13 回・第 14 回が遠隔同期（Zoom）型での変則的な実施となった。遠隔同期

（Zoom）型での授業内容等については、後に詳述する。

なお、執筆者は本年度から本授業を担当していることを付記しておく。

2. 授業評価・授業研究の内容

授業評価は、前期・後期ともに小レポート 50%、期末課題 50%で行った。小レポートは、その日の授業内容に関して受講生にテーマを課し、400～800 字程度で記述をしてもらい、Moodle を通じて提出をしてもらった。また、小レポートに加え、授業内容等に関する質問がある際には、別に記述するよう指示した。小レポートの一部及び質問に関しては、次の授業動画の冒頭において紹介・回答し、受講生に対してフィードバックすることを心掛けた。遠隔非同期型のため、学生同士で交流することは困難であったが、毎時フィードバックを行ったことで、「質問対応なども講義の時間をかなり使ってしてくださっていたり、その質問が、自分も同じく疑問に思っていることが多く取り上げられていたので、すごくためになった。」「授業での毎回の課題は、その回に扱った内容を基に、具体的な教育場面に

ついて考える内容が多く、授業内容の理解を深めることができた。」といった声が受講生から得られた。

また、前期・後期ともに第 14 回に各自で作成をしたキャリア教育の実践プログラムについて発表をする、という時間を設けた。前期では、Moodle のフォーラム機能を用いたが、それまでに学生同士での交流等も行っていなかったため、学生間の交流が不十分であることが課題であった。そのため、学生間の交流や学習を深めるための授業方法や内容について再検討した。執筆者は、2021 年に「授業デザインワークショップ」など FD 研修等を受講し、学びを深める授業デザインの方法を学習した。そこでの学びを踏まえ、後期では、第 13 回・第 14 回に遠隔同期（Zoom）型で学生間の対話的な学びを促進する方法を実践した。具体的には、第 13 回において、キャリア教育において育成を目指す基礎的・汎用的能力に関して、グループに分かれて、ジグソー学習的にそれぞれの資質・能力について調べ・共有する時間をとった。続いて、共有した知識を踏まえ、それらの資質・能力が育まれる教育実践についてグループ内で検討した。

ここでの学習を踏まえ、受講生はそれぞれ第 14 回までにキャリア教育の実践プログラムを作成し、第 14 回においてグループに分かれて互いのプログラム・指導案についてディスカッションを行った。この作業により、受講生からも、「指導計画は過去に作成したことがあるものの、作成しただけで終わったため、他の人はどういう視点で作成しているのか、自身の指導計画はどこが良くて、どこを改善すべきなのかは不明だった。そのため、第三者から自身が作成した指導計画に対して意見を述べてもらうことができたのは新鮮であり、かつ今後の参考になったために印象に残った。」「授業指導計画をグループで見せ合い、意見交換するなかで、改善点が見つかったり、自分では思いつかなかったことを提案してもらえたりしたので、良かった。」など、個人で学習する以上の成果が見られた。

最後に、本授業で実施したアンケート結果を以下に示す。なお、前期では遠隔非同期型ということも影響し、十分な回答数が得られなかったため、後期に実施したアンケート結果を示すこととする。回答総数は 54 名で、有効回答数は 54 名である。質問内容は、本授業

を通して教育学部ディプロマ・ポリシー（以下、DP）に対応した資質・能力をどの程度習得できたかを問うものである。回答は4件法（1:とてもそう思う、2:ある程度そう思う、3:あまりそう思わない、4:授業の目標・内

容がこのDPとは無関係である)でたずねた。

上記の結果からは、どの項目においても、9割以上の受講生が一定程度の資質・能力が身につけていることが示される。また、「この授業で出された課題や予習・復習のために、授業時間外に費やした学習時間は平均で一週間に何時間程度ですか」という質問に対しては、平均して約1.5時間、「この授業で出された課題や予習・復習をおこなうこと以外の理由で、この授業に関連して時間外に費やした学習時間は平均で一週間に何時間程度ですか」という質問に対しては、平均約0.5時間であった。これらの結果から、授業内外での学習時間も適切に確保できていたと考えられる。

今後は、本年度に行った授業実践をもとに授業研究を継続し、より学びを深化していくための内容の精選や授業方法を改善していくことが課題となる。

